神護寺文書(五)

一三九　前石見守友景書狀(建長二、二、廿九)

(端裏書)「冷泉殿吉富通道被開時、廳御使下向遲怠間事」

吉富細川庄道相論事、院廳御使遲々之由、被申藤中納言殿候之處、御返事如此候、定忿下向候歟、此由有御存知、可被申候歟、恐々謹言、

○イ「建長貳年」二月廿九日　　前石見守友景(花押)

一四〇　前石見守友景書狀(建長二、二、廿九)

(端裏書)「石見前司吉富細川事建二、二、廿」

吉富細川道相論實檢御使事、御返事、先度申進候了、而藤中納言殿御教書、如此候、以此旨、可令申沙汰給候、恐々謹言、

○イ「建長貳年」二月廿九日　　前石見守友景(花押)

謹上　安富民部大夫殿

一四一　修理權亮資俊書狀(建長二、二、廿九)

廳官知國、昨日下向細川候了、只今知國子息出來事候之間、相尋候之處、一定昨日下向候之旨、申候、不可有隱候、知國者、細川路次ノ邊ニ相儲候云々、武家使者、下居吉富庄候之由、承候、相互觸遣候之間、如此申候歟、知國乘物不候之旨、申候之間、昨日沙汰遣候了、又細川御作手逃脫之由、承候之間、如粮料、沙汰遣候了、昨日下向之條、勿論不及子細候、爭可申虛誕候哉、後不可有隱候、

以此旨、可令申上給、資俊恐々謹言、

○イ
「建長弐年」
二月廿九日　　修理權亮資俊奉

一四二　葉室定嗣奉書(建長二、二、廿九)

(端裏書)「院宣吉富通道被開事」

細川庄實檢使事、廳申狀如此候、下向之子細、載狀候歟、定嗣恐惶謹言、

○イ
「建長弐年」
二月廿九日　　定嗣

○裏書「中御門藤中納言奉書」

進上　伊豫中將殿

一四三　某書狀(弘長元、八、十七)

足守庄地頭又代官末元條々非法狼藉間事、不遂對決者、難事行歟、早企參洛、可令遂其節之由、地頭又代官之許へ、直被成下六波羅殿御教書候了、此條不可然候之間、

爲守護所之沙汰、可令召進之由、可被仰下候歟之旨、重依令申沙汰候、彼御教書ヲ被成直候て、守護所へ被仰下候了、且件御教書案文二通、爲御不審進上候、正文ヲ入見參候ヌ、可下遣候之處、爲收納、代官ヲ忿下遣候つる間、以彼便宜、令下遣候ハんとて、案文ヲ入見參候、正文ヲ已下遣候了、內々御存知此旨候、可有申御沙汰候哉、恐々謹言、

○イ
「弘長元年」
八月十七日　　(章　名)

大藏卿阿闍梨御房

(切封)
○イ又
「地頭代代官非法事　弘長元年」

○イ
「足守」
大藏卿阿闍梨御房　　(章　名)

一四四　神護寺住侶請文案(弘長三、八、廿六)

(端裏書)「兵具禁制、院宣之請文案文弘長三年八」

當寺兵具禁制事、院宣謹以令拜見候畢、早存此旨、殊可令禁遏候、若違犯之輩候者、任被　仰下之旨、可令注進交名之由、住侶一同、謹所請如件、

○イ「弘長三年」八月廿六日　　年預成有
　　法橋賢芳

一四五　小野細川御作手重訴狀（文永五、十二）

（端裏書）「御作手重訴狀」

小野細川御作手等重言上

欲早停止吉富庄民自由無道、如元可領知旨、被仰下、

當御領北境間事、

右謹考案內、當御領山者、元主殿寮領也、而去寛治年中、以寮領內、被割進仕所御續松料採所以降、爲代々　仙洞御領、更無有牢籠、而近年彼庄民等、背舊規、恣企押領、及種々惡行之間、被糺決兩方之理非、可有　聖斷之由、就言上、數度雖被下　院宣、一切不拘御制、不憚朝威、惡行彌以倍增、違　勅之咎、難遁者歟、委去弘長元年、庄民等、注進繪圖、備證據之間、件繪圖、立券御使幷國使等、不加判形、爲胸臆注進之間、難被信用之由、言上之處、重陳狀云、官使定堺打牓示、所被作繪圖也、此子細、彼繪圖、先度備上覽畢、今更何賜別　宣旨、可被成廳御下文哉云々取詮、而今備承安廳御下文、此條疑殆不少、始者官使下向、作繪圖、此外無證文云々、後者備院使下向之廳御下文、前後之間、謀略無疑者歟、承安御下文、縱雖爲實書、御作手等之所存、更無相違、其故者、彼御下文云、壹處、有頭郷、四至、限東久利尾當下、限南神吉氷室云々取詮、如狀者、久利尾當下、稱吉富庄東境歟、全非兩方南北堺、而彼以北、自湯次谷當下、一巡押領之條、謀案之至、顯然也、湯次當下、惣不載狀中之上者、勿論也、寮領堺者、赤尾橋是也、閑根本之舊境、企新儀之掠領、奉掠上之條、更非正理者也、又尻頸高羅兩尾山者、久利尾當下以東也、彼當下、已背先規、掠領之、非正儀之上、件以東、爲堺外、惣非對論之限、顯然之處、

庄民一向押領之、伐拂松料木、遂科作(耕カ)、御作手、適入部之時、及打擲刄傷、且去九月破却之炭釜、有此所、今所進覽之廳御下文、彌顯庄民等之自科、何無御炳戒哉、又云、脇膀示五箇所、壹所志不谷、壹所鳥坂、壹所細川御勅旨南堺云々取詮、件南何所哉、不被載領知分限、當御領北堺者、播磨瀨赤尾橋等、無相違之上、勿論也、又云、同郷内舊勅旨田并神吉僧侶等、且觸本所領家、且取國司廳宣、立替他所乎云々、當御領并吉富庄共、有頭郷也、當御領者、寛治年中建立、已送百八十餘歳星霜、吉富者、承安庄號、八十餘年以後也、仍任以前建立、無異論之條、炳焉也、將又細川御勅旨南堺云々、此所者、當吉富南堺神吉氷室以東歟、而限愛宕山四所明神之御在所、御作手等之領知、聊無異論者也、於北堺者、以前言上播磨瀨赤尾橋彼兩所、更無相違、承安廳符、全不限湯次當下、庄民等之自由押領、已以露顯、彼御下文、尤爲御作手等之潤色、今進覽、自然之運也、所詮可爲當御領北堺之由、被仰下之、於狼藉之輩者、爲向後傍輩、任以前注進之交名、被召出之、欲被斷罪矣、仍言上如件、

文永五年十二月　日

一四六　仁和寺宮御教書(一、十二、廿七)

小野細河御作手訴訟事、院宣副廳狀具書等如此、何樣可候哉之由、所被仰下也、仍執達如件、

十二月廿七日　　法印勝禪

年預御中

一四七　仁和寺宮御教書(弘安元、十一、廿五)

(前缺)

但如本願上人狀者、必以寺住者、可令知行云々、然者、定演僧都、若不住寺者、早以住寺之門弟、可令相傳給之由、御室御消息所候也、仍執達如件、

弘安元年十一月廿五日　　法印(花押)

謹上　加賀僧正御房

一四八　龜山院々宣(弘安八、七、四)

神護寺領役夫工米事、建永離寺領之時、雖有辨濟之例、

文治被下免除院宣之上、承久被返付寺家之後、又不勤仕云々、此上早可被免除之由、御氣色候也、仍上啓如件、

弘安八年七月四日　　左少辨雅藤

謹上　長者僧正御房

一四九　仁和寺宮御教書（——、六、廿三）

親清申西津庄事、行廣申西保公文職事、具書等、被遣之候、可被評定申之旨候也、仍執達如件、

六月廿三日　　權少僧都教勝

謹上　大藏卿阿闍梨御房

一五〇　仁和寺宮御教書（——、七、三）

（端裏書）「御教書」、行廣西保公文職事、重申狀、被下之、」

西保公文職間事、行廣朝臣重申狀、如此、可被加評定歟之由、内々所候也、恐々謹言、

七月三日　　教勝

年預御中

一五一　仁和寺宮御教書（弘安九、二、廿二）

福井西保、被返付寺家候也、可令存知給之旨、所候也、仍執達如件、

○イ「弘安九年」二月廿二日　　法印教勝

謹上　年預御中

一五二　尼念淨讓狀（建長六、五、廿七）

（裏繼目に花押半分見ゆ）

（端裏書）「若狹國西津讓わかさのくににしつの庄のゆつり狀」

ゆつりわたす、相傳領さうてんのりやう、わかさのくに、若狹國にし西津庄つのさうの事、此所このところは、念淨ねん上かせんそ、先祖相傳さうて庄童名總王くんのさうなり、わらはなかめわうに、給たひ候ぬ、但たゝし同孫おなしまこと申候なから、太郎左衞門たらうさゑもんひろさねと

そ、幼おさなくよりおぼしたて立ゝ候へは、ひろさねにたひ給候はんすれとん、それはたうしとかけす候へハ、かめ其當時事欠亀王殿わうとのに、一こかあひた、期間さほいなくたひ候ぬ、かつ且相違無給はかめわうお、亀王御寺みてらにまいらせ候ぬ、めのわつらはし目煩思召く候に、おんはうたちの御房達なかに、いとおしくおぼしめ置給して、おかせたまふへく候、亀王期後さてかめわう一このちは、太郎左衛門相違無相傳たらうさゑもんひろさね、さほいなくさうてんし候へく候、但子孫中人若たゝしひろさねかしそんのなかに一にん、もしは、親人御寺寺僧名したしく候ハんものにても一にん、みてらのしそうのなおかけて、相傳さうてんせさすへく候なり、かつはみてらの且御寺様念おぼせのまゝに、かやうには、はからひ申候なり、ねん計祖母上かそはにて候し人、みてらニあさからす、こゝろさし御寺淺志深(カ)ふかくおもひまいらせて、護摩堂造参こまたうつくりまいらせて、備中足守若狭國西津二所ひちうのあしもり、わかさのくににしつお、ふたところ、孫起請参置きせいしまいらせおき候ぬ、ねん上そのまこにて候へ念上御寺は、みてらのほうこういたしまいらせて候うゑ、みてら奉公致参

散々成さん〳〵ニならせ給候しときも、時志参わすれまいらせ候こと事宮仕覺上ん候はす、みやつかゝしまいらせて候しかは、上かくさう人房下文賜(脚カ)にんの御はうの御くたしふみ、たまはり候ぬ、かつは且古知食人覺上ふるき人々、しろしめして候らん、上かくしやうにんの約御房足守念給はうは、あしもりおも、ねん上ニたはへとこそ、御やく束そくは候しか、(カ)其故念ねん上かおとゝのゑせう弟房御山幼自ハうと申して、おんやまに、おさなくより候しか、さん散々〳〵ニおんやまのならせたまひて候しあひた、ゑたゑ候成山給間得堪はて、しはらく候はさりしことの候しお、御はうたち、暫事房達申ゆるして候しかはもとのことくニ候、このにしつにお赦ことの候し此西津於きゝ候ては、ねん上かゆつりにまかせて、相違無御沙汰たあるへく候〳〵、念譲任さほいなくこさ

かくは申候とん、昔自宛置むかしよりあておかせ給たらんみくん御公事解怠御寺背参しおもけたいし、みてらおもそむきまいらせ候はん、こ細ま〳〵と申候とん、ちからなく候、力無

建長年けんちやう六ねん五月廿七日

尼念
あまねん上（花押）

此狀（カ）書
このちやニかきて、高雄御寺置たかぼのみてらにおきて、大衆たいすの御覽
御なかに、こらむせさせ給へとて、統前ちくせんのほけうの法橋
御房はうへ、參まいらせ候ぬ、此これおはそれに、置おかれ候へ
覽上人房下文
く候、上かくさうにんの御はうの御くたしふみも、それ
置
におかせ給へく候、

尼念
あまねん上（花押）

和泉太郎左衛門殿
いつみのたらうさゑもんとのに

○註　本文書と一五三號文書との裏繼目には、花押があるので　年代順に配列することを見合せた。
猶本文書は、七九號文書の端裏書に依れば、七九號文書及び八〇號文書等と一聯をなしてゐたものゝ如く、彼是の裏繼目花押に相通ずるものがある。
猶又本文書の紙繼目裏毎に、尼念淨の花押及び一五三號文書との裏繼目花押と同一の花押がある。

一五三　左衛門尉藤原親盛讓狀（正應元、六、廿）

讓與　若狹國西津庄下地半分事
相傳帶
右當庄者、親盛重代さうてんの所たい也、而ふりよのら不慮牽
籠依
うろうによりて、訴訟ニつかるゝ疲處、賀茂のかわらやの致
祕計
民部卿律師御房の御ひけいとして、沙汰をいたさるゝ上、
有所緣之間、當庄半分、能惡平均ニをしわけて押分、永所讓
進也、寺役以下事、於知行分者、任先例、且致沙汰、且
可令所務給也、將又實檢以後も、隨其分限、可被守此讓
狀也、但於手繼證文者、不貽一紙、讓渡民部卿律師御房
了、向後更不可有他妨之狀、如件、
正應元年六月廿日　左衛門尉藤原親盛（花押）

（奥書）「○イ親盛自筆也」

○註　本文書と一五二號文書との裏繼目には、花押があるので、年代順に配列することを見合せた。
猶本文書紙背の中央下部に、親盛の花押一箇がある。

一五四　權少僧都尊辨書狀（正應二、八、八）

弓場坊并後坊供僧、令讓進候、早自當時、申入子細於貫首、可令拜任給候、恐々謹言、

正應二年八月八日　　權少僧都尊辨(花押)

謹上　民部卿律師御房

一五五　左衞門尉奉書案(永仁二、八、十)

○本帋
(端裏書)「下知御作手等案」

神護寺領吉富庄訴事、
院宣并關東御下知以下、被遣之、此事、前々以器量之仁、於武家可明申之由、度々雖被仰、依無其儀、自武家御注進之處、如此被成御下知了、早可令停止商賣之煩、此上若致路次狼藉、定有後悔歟之由、被仰下之狀、如件、

八月十日　　左衞門尉判

小野細川沙汰人名主等中

○禮帋
内々言上
下知狀案、爲御意得、進入候、同可令披露給、重恐々謹言、

一五六　後深草院々宣(永仁二、八、十八)

(端裏書)「院宣　吉富庄雜掌訴事　永仁二、八、廿六」

吉富庄雜掌道性申、小野細河御作手等、狼藉由事、任關東御教書、可加下知之旨、被仰廳候之處、資卿請文如此、可被仰遣武家候歟之由、
御氣色所候也、仍言上如件、

八月十八日　　大宰權帥經任

進上　今出川殿

一五七　西園寺實兼御教書(永仁二、八、廿三)

(端裏書)「西園寺前太政大臣家御消息」

吉富庄雜掌道性申、小野細河御作手等、狼藉由事、帥卿奉書副具如此、子細見狀候歟由、前太政大臣殿可申之旨候也、恐々謹言、

八月廿三日　　前越前守師衡奉

謹上　刑部少輔殿

一五八　後二條天皇綸旨（嘉元三、後十二、六）

神護寺領役夫工米事、任弘安例、早可被免除之由、
天氣所候也、仍執啓如件、
○貼帋
「嘉元三乙巳」
後十二月六日　　左中辨仲親

謹上　眞光院僧正御房

一五九　六波羅下知狀（德治三、二、十六）

神護寺領播磨國福井西保役夫工米事、御室御教書副雜掌解具書
如此、當保雖入弘安配符、於　勅免地者、所有其沙汰也、
早可被停止當時譴責、仍執達如件、
德治三年二月十六日　越後守（大佛貞顯花押）

江田五郎入道殿
伊豆五郎太郎入道殿

一六〇　後宇多院御諷誦布施請文（德治三、三、廿四）

院
請諷誦事
三寶衆僧御布施、麻布參佰端、
右諷誦、所請如件、
德治三年三月廿四日　　別當正二位行權大
納言兼陸奥出羽按
察使藤原朝臣○自署「寶
泰」奉

一六一　後宇多院御諷誦布施請文（德治三、三、廿四）

院
請諷誦事
三寶衆僧御布施、麻布參佰端、
右諷誦、所請如件、
德治三年三月廿四日　　別當正二位行權大
納言兼陸奥出羽按
察使藤原朝臣○自署「寶
泰」奉

一六二　仁和寺宮御教書(德治三、六、廿七)

○禮帋
追申

今月八日院宣、昨日到來之、

○本帋
當寺灌頂阿闍梨事、院宣如此、以此旨、且可被相觸寺家之由、依別當前大僧正御房仰、執進如件、

六月廿七日　　法印禪隆

謹上　年預御中

一六三　福井庄東保宿院村地頭代澄心重陳狀(應長二、三、九)

(端裏書)「澄心重陳狀應長二、三、九」

播磨國福井庄東保宿院村地頭代澄心重辨申

爲當保雜掌賴祐、巧新儀今案、立廿六箇條篇目、就訴申、捧一々陳詞日、失爲方餘、拔出三箇條、重及謀訴、甚無謂、其上湯淺八郎宗武、爲武家被管身、背嚴制、望補當保預所職、致地下濫妨、令煩土民、令張行非法條、爲希代珍事上者、速被停止上司職、忽被處罪科、於賴祐閉口條々者、可任先例旨、預御裁許、至余殘謀訴者、欲被弃置子細事、

副進

一通　關東御下知案貞永元、九、廿四、不可相綺雜掌下地由事

一通　關東御下知案永仁五、十一、五、傍輩上司事

一通　關東御下知案永仁五、二、々、檢斷地頭一方事、先進畢

一通　公文徵符案　下司名事

右於當保地頭職者、追吉河左衞門經光法師之例、任代々關東御下知、敢無新儀沙汰之處、宗武代賴祐、立廿六箇條篇目、就訴申、捧一々陳詞之刻、如賴祐重狀者、三箇條也、於自余段々者、悉閉口之上者、無理之至、顯然也、然則任先例、欲蒙御裁許者也矣

一　傍輩上司職事

當保者、爲神護寺領、往昔以來、雜掌一人管領之地也、而去々年延慶二、始而被補二人預所播磨房童名百壽丸之湯淺八郎宗武之

條、新儀也、非例也、爰宗武者、爲本在京人之一分、當奉公之仁也、而背嚴制、望補上司職、引率紀州數輩惡行人等、亂入庄家、張行新儀非法之餘、或令放火百姓住宅、或奪取農中數十疋牛馬、令駈仕京都上下乘馬夫駄、自余惡行者、不遑毛擧、言語道斷次第也、且如永仁五年十一月五日賜木屋村地頭關東御下知者、百壽丸今者播磨房、爲武家被管之身、背御制、望補當庄上司職之條、可有其咎之旨、光家雖申之、百壽丸代々爲當寺々僧、非指御家人、仍光家訴訟、不及沙汰云々、然則於爲御家人者、可有罪科之條、勿論也、將又傍例多之者也、

一賴祐重狀云、於關東申披子細之由、稱申之、或所務條々內、雖加自由之了見、皆以御下知下事也云々、取詮、此條存外申狀也、去永仁年中、雜掌相論所務之刻、木屋村、宿院村、水度呂村、爲一具沙汰之間、關東御注進之時、於木屋村者、番于訴陳之間、地頭既預條々得理御下知畢、至宿院水度呂兩村者、依爲未濟、御注進被返進、於京都究淵底、重可有御注進之旨、就被仰出、今番于本訴之上者、云非御下知違背之段、云申披子細之條、何求證據於他所哉、顯然之次第也、就中於關東御教書已下具書者、本奉行人雅樂入道正觀之許在之歟、早仰彼道跡、被召出之、巨細忽可露顯者也矣、

一同狀云、正枝名不寄村雜掌幷下司等、押領下地、抑留年貢課役之條、澄心承伏云々、此條不足言申狀也、承伏何事哉、一切無其儀、如載于先段、當保者、追梶原平三景時之跡、任吉河左衞門經光法師之例、致本司之所務之間、一事以上、無新儀沙汰、其上雜掌、不可相綺下地之旨、貞永元年御下知、幷寛喜元年關東御使平左衞門入道盛阿等分文、炳焉也、次號下司者、誰仁哉、當村下司者、如公文徵符者、下司分田壹町又次郎左衞門尉、高重令相傳歟之間、當時令勤仕兩方所當公事者也、將又庄官名主等本給田者、雜掌不可相綺下地之上者、不及口入者也、若有余殘競望之仁者、尤屬地頭方、可申子細之處、混所務篇目之條、雜掌僻案也、不御沙汰之限歟、於正枝名年貢之段者、如載于先陳、以憲法之御使、云下地勘否、云年貢進未、被遂結解之日、可令眞僞露顯、

全不可有乃貢未進者也、

一同狀云、地頭加徵者、守內檢得田、取來者先例也、而地頭等、不除內檢損田、宛下地責取之條、不便次第也云々、此條又以難及雜掌口入、宛取下地之所見何事哉、胸臆浮言、不御信用之限、任先例、致其沙汰之上者、一切無土民之煩、若有新儀之時者、可爲百姓等訴訟、雜掌口入、永可令停止者哉、

以前條々、披陳如斯、抑地頭者、京都關東恒例臨時御公事、重役無其隙、所謂南都北京守護、熊野發向、海上警固、流人送迎等、朝夕奔走、不可勝計者也、預所者、只自身私用之計也、然不退在庄預所播磨房者、以新儀、令數町田畠耕作、召仕百姓足手牛馬以下、是非例也、在京預所湯淺八郎者、不商東作之期、不嫌西收之時、奪取百姓等農馬數十疋、乘用京都上下之間、農作之煩、違期之歎、土民之愁嘆、職而在斯、其上御沙汰未斷最中、任雅意、奪地頭所務之條、中間狼藉、爭無御炳誡哉、凡神護寺者、公家武門御祈禱料所歟、然者、令專御願勤行、令抽練行之忠節、於綺可有穩便之沙汰處、補武家被管宗武於預所職之間、偏募權威之余、闕取佛性燈油料物、悉用在京奉公依怙之條、且背佛意、且違人望者歟、是併寺家姦弊之濫觴、土民侘際之根源也、付彼付此、尤可有誡御沙汰哉、然者、早被處其身於傍輩上司之罪科、爲被停止雜掌無窮訴訴、粗言上如件、

應長二年三月　日

○本文書紙繼目裏毎に花押一箇あり。

一六四　鎌倉幕府下知狀寫(貞永元、九、廿四)

下　神護寺領播磨國福井庄西保住人

仰條々

一下司公文兩職事、

追東保地頭經光法師之例、可致沙汰之旨、重時朝臣幷時盛等、加下知畢、受東保先例事、無相違、於經年序者、限本給屋敷、何及子細哉者、早任東保之例、可致沙汰焉、自余略之、

貞永元年九月廿四日　　武藏守平朝臣在御判

相模守平朝臣在御判

○註　以下三通の文書は、一六三號文書に支證として援用された文書である。依てこゝに收める。

一六五　鎌倉幕府下知狀寫（永仁五、十一、五）

木屋村

一　傍輩上司職事

右如六波羅注進訴陳狀具書等、雖子細多、所詮如重家申者、百壽丸、爲武家被管身、背御制、望補當庄上司職之條、可有其咎之由、光家雖申之、百壽丸代々爲（ママ）當時々僧、非指御家人、仍光家訴訟、不及沙汰云々、自余略之、

永仁五年十一月五日　　（ママ）奥陸守平朝臣在御判

相模守平朝臣在御判

一六六　宿院村公文御米徵符注進狀寫（——、十）

注進　宿院村延慶二年御米徵符案

合

一間人分

下司分一町　分米五斗七升　自余略之

十月　日　　公文代

○註　以上三通の文書は、一六三號文書に支證として援用された文書である。依てこゝに收める。

一六七　興（カ）禪書狀（元應二、十一、三）

○證帋（端裏）「（切封）」

追申

佛聖沙汰寺官下向事、已下知候了、彼使者入部事、以外次第候、忩被差下御代官等、可有鎭御沙汰之由、評定候也、

○本帋

春德丸使者入部事、公文申狀、披露候之處、庄家不可叙用之由、先日被下知候了、子細同前候、凡如此大事出來之時者、尤以專使、可申上候之處、付申便宜之條、不可然之由、嚴密可令下知給之旨、評定候也、恐々謹言、

○イ
「元應二」
十一月三日　　興(カ)禪

一六八　興(カ)禪書狀(元應二、十二、十八)

○禮帋
(端裏)「一心坊(切封)律師御房　　興(カ)禪」

追申
春德丸沙汰事、其後何樣候哉、兼又當庄課役事、大旨
預所役候、度々分相積候歟何樣可沙汰候哉、

○本帋
西津庄泰應(カ)等訴事、訴人其後不出對候上者、給御擧狀、
幷寺家可申沙汰之旨、奉行辨申候云々、寺解等事、忩可
令計沙汰給之由、評定候也、恐々謹言、

○イ
「元應二」
十二月十八日　　興(カ)禪

一六九　某書狀禮帋書(年月日欠)

(端裏)「一心房(切封)僧都御房　　(草名)」

追申
當庄預所役、全分無御沙汰之條、無勿體候、乍有庄務
之號、預所役闕怠、無其例候、又壇供事、先年公方沙
汰之時、寺家出擧狀、隨分被沙汰之間、於向後者、可
有御沙汰之由、一段候了、可爲何樣候哉之由、評定候
也、

一七〇　後醍醐天皇綸旨(元亨二、後五、廿六)

○禮帋
(端裏書)「綸旨　神護寺領役夫工米事、元亨二、後五、廿六日」

追申
於地下之譴責者、可被停止候、京濟事、差日限、可被
召進請文之由、同被仰下候也、可得御意給、

○本帋
神護寺領役夫工米事、奏聞之處、
若狹國西津庄　　播磨國福井庄

紀伊國笠田庄　同國河上庄
同國神野眞國　備中國葦守庄
右六ケ所、載建永弘安兩度配符之上、任一同之法、不可被免除之由、猶早可有御下知之旨、被仰下候也、以此旨、可令申沙汰給、仍執達如件、
後五月廿六日　右中辨行高上

一七一　後醍醐天皇綸旨（元亨二、七、十九）

（端裏書）「綸旨　神護寺領役夫工米免除事」

神護寺領役夫工米事、任弘安例、可被免除者、
綸旨如此、以此旨、可令申入仁和寺宮給、仍執達如件、
○貼紙「元亨二戊」
七月十九日　右中辨行高
謹上　大教院法印御房

一七二　仁和寺宮御教書（元亨三、七、廿九）

○禮紙（端裏）「（切封）」

追申
寺家方役事、（カ）維快狀副注文如此、可令存知給候也、
○本紙御忌日講問衆事、面々子細、無御存知之間、還似有沙汰之煩、供僧三人、加評定、可被差定、向後可爲此儀之由、
御氣色候也、恐々謹言、
○イ「元亨三」
七月廿九日　禪隆
御僧御中

一七三　神護寺三綱大法師等解（元亨三、八）

（端裏書）「神護寺」

神護寺三綱大法師等謹解
欲早被經御奏聞、蒙代々勅免寺領等、諸寺諸社一同御沙汰落居間、可止當時謹責由、被下綸旨、當寺領役夫工米事、
副進

一卷、文治以來、迄于元亨二年、代々　勅免　綸旨等案
右役夫工米者、文治寺領等、悉蒙　勅免以來、雖達度々造
宮、未有一度勤仕之例、依之去年七月、重被下免除　綸旨
畢、仍備右、而今稱被下　宣旨、曾以於無濟例之地等、
神部以下致譴責之條、寺領率籠、不便次第也、但帶代々
免證諸寺諸社、悉爲一同之勤者、獨難背　勅命、而南北
兩京、未及遵行歟、所詮天下一同御沙汰落居之間、每度
帶　勅免、無濟例寺領等、可止當時譴責之由、爲被下
綸旨、謹以解、

元亨三年八月　日

○帯背中央に、花押一箇あり。

一七四　後醍醐天皇綸旨(元亨三、九、廿一)

神護寺領役夫工米事、禪助僧正狀副具書如此、子細見狀候
歟、可守傍例之由、令申之上者、可止地下譴責之旨、可
被下知由、被仰下之狀、如件、
○貼帯
「元亨三」九月廿一日　　右中辨(花押)

造宮使殿

一七五　快承書狀並某勘返狀

(元德元、十二、廿六)

(端裏)「　　行□」

但承仕なとにて、年中可被下遣にて候ハヽ、不及
申候、公事計會之間、きと勘申候、恐入候、
〈深雪無骨候て、未及披露候、
〈御教書事、已御披露候哉、〈便宜實目出候歟、年中ニ承仕
只今若州〈便宜候とて、法
下向も其煩候之上、近日方々〈下候間、無人數候、御計可宜
橋申候之間、態人を下候へんよりもと存候之上、年中使
存候、然者案文を給候て、可令披露候、其分ニテ可足存候、
方〈付候者、可宜之由、相存候、相構付此使者、可返給
候哉、〈恐々謹言、
○イ
「元德元」
〈十二月廿六日　　快承　行□

法身院御房